

20. イトウ *Hucho perryi* (Brevoort)

図版 6

英名 Sakhalin taimen, Japanese huchen

露名 сахалинский таймень
サハリンスキータイメニ

地方名(北海道) オビラメ、オヘライベ、イト、イド、チライ

漢字 鮠、イトウ

アイヌ語名 チライ、トシリ、オペライベ、ヤヤツテチェブ、シアツチェブ

【形態】 頭部背面は平坦^{へいたん}。体高*が低く、体は全体に細長い。口は大きく、両あごに丈夫で鋭い歯を数多く持つ。体の背部は緑褐色、体側は銀白色で腹部は白く、背部から体側にかけて小黑点が多数散在する。脂びれ*は大きく、尾びれ後端中央の切れ込みが大きい。産卵期、大型の雄には胸部から尾びれの先まで鮮やかな紅色から橙色の婚姻色*^{こんいん}が現れる。稚魚*は体側に6～9個のパーマーク*^{びき}を持つが、尾叉長*^{ふめいりょう}約13cmで不明瞭になり、やがて消失する。日本産淡水魚類では最も大きく成長し、まれに1mを超える個体が採捕される。

【生態】 かつて青森県にも生息していたが、現在、日本国内の分布はほぼ北海道のみ。国外ではサハリン、沿海地方、南千島に分布。北海道北部や東部、石狩川など、規模の大きい河川や広い緩やかな流れを持つ湿原河川などに生息する。現在の分布南限は北海道南西部の尻別川。

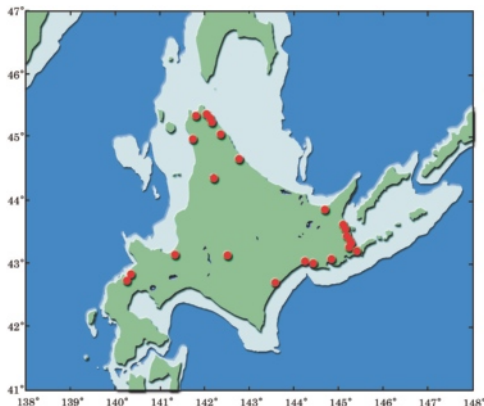
イトウ属*魚類はユーラシア大陸とその近隣の島々に分布し、イトウ、シベリアやアムール川のタイメン *Hucho hucho taimen*、ドナウ川のフーヘン *H.*

hucho hucho、鴨^{おうりよつこう}緑江のコウライイトウ *H. ishikawai*、長^{ちようこう}江の虎嘉魚 *H. bleekeri* が知られている。そのなかでイトウは唯一、降海^{じやうかい}*性を持ち、縦^{じゆうれつりん}列鱗数*が100~120とほかのイトウ属魚類の150~200より少ないことから、*Parahucho* という亜属*を設けてそこに含めようとする考え方もある。イトウは染色体*数が62と、タイメンやフーヘンの82~84より少ないことも特徴的である。イトウ属は、現存するサケ科魚類のなかで *Brachymystax* 属に次いでサケ科魚類の祖先集団から分化した原始的なグループとされる。

自然下での成長は遅いが、主に初成熟*年齢が高く長寿であることにより大型となる。浮上*後、翌年の春で尾叉長約7 cm、20cmを超えるのに3年、50 cmを超えるには5年以上を要する。成長は2~3年目から比較的速くなるが、高齢になるに従い再び鈍る。雄で4~6年、尾叉長40cm、雌で6~7年、60cmで初成熟する。産卵後も死なず、一生の間に何回も繁殖に参加するが、すべての個体が毎年産卵するわけではない。最大寿命は不明であるが、サハリンのイトウで老化による死は12~13年目から起こるとされる。

産卵期は4~5月。成魚*はふだん生息している河川の中・下流域や湖沼から、産卵場所の本流上流域や支流まで雪解け増水時に遡上*^{そじやう}し、増水がおさまる間に産卵する。産卵床*は主に淵尻*^{ふちじり}の平瀬*^{ひらせ}に、雌によってつくられる。雄は雌の獲得のためにしばしば同性間で闘争するが、体の大きい方が優位になることが多い。産卵行動は雌雄1対のペアで行われ、イワナなどでみられるような複数の雄が同時に放精することはあまりない。精巢はほかのサケ科魚類に比べ非常に小さく、放精量もわずかである。雌は一度に一腹の卵すべてを産み出すことはなく、通常5~6回に産み分ける。1カ所の産卵床で5~6回すべての産卵を行うことはまれで、平均3カ所の産卵床に分けて産む。5~6回の産卵の間、ペアの相手を変えていく。

抱卵数*は尾叉長60cmで約2,000粒、80cmで5,000粒を超える。卵は直径5~6 mmで、黄色から橙赤色。受精後、発生に要する積算水温*は発眼*までに約200°C・日、ふ化



北海道におけるイトウの分布



イトウの稚魚(上、尾叉長5.1cm)と幼魚(下、12.5cm)

までに320～355°C・日、浮上までは600～625°C・日。ふ化仔魚*は全長*約15mm。

7月中旬～8月上旬に尾叉長約30mmで浮上した稚魚は、ほかのサケ科魚類の稚魚と同様に、流れの緩やかな平瀬などの岸近くの浅い所に分布する。イトウの稚魚は排他性が強く、

接近するほかの稚魚を激しく追い払う。イトウの幼魚*は成長しても岸近くや枝沢の物陰で生活し、サクラマスの幼魚のように成長に伴い流心部へ生息場所を拡大することはない。成魚がふだん生活する中・下流域や湖沼に現れるのは浮上後約3年、尾叉長約20cmを超えてからで、一部の幼魚はこのころから降海するらしい。

降海個体の割合は地域によって異なる。サハリンではほとんどの個体が降海し、北海道北部や東部でも多くの個体が降海するようだが、北海道のほかの地域では川を下りても汽水*域きすいまでで、海へ出ることはほとんどない。

尾叉長約10cmまでは水生および陸生の昆虫を主な餌とするが、約15cmからは小型の魚類も捕食するようになり、成長が良くなる。約30cmからは魚類を主な餌とする。

近年、多くの生息地でイトウの個体数は激減しており、その原因として生息環境の悪化が大きいといわれる。サケ科魚類で大型になる種の多くが成長の場を海洋へ求めるのに対し、北海道に生息するイトウは一生のほとんどを人間の生活圏に近接した淡水域で過ごす。また、同じく希少淡水魚で個体数が激減している日本のメダカ *Oryzias latipes* が小さな水路内だけで一生を完結できるのと対照的に、イトウは産卵する河川上流域から幼魚のすむ枝沢、成魚のすむ河川中・下流域や湖沼など多様な生息環境を必要とするうえ、それぞれが近接していないので成長や産卵に伴い大きく移動する必要がある。

したがってイトウの保護には、ほかの希少淡水魚に比べて、より広域的な環境の保全が必要である。環境省は「まぼろし幻の魚」イトウを絶滅危惧種*に指定しているが、保護区域の設定など具体的な法規制はほとんどない。イトウが安定して再生産*できる川を未来につなげていくためには、釣った魚の放流や

産卵親魚の保護はもちろん、産卵場所や稚魚、幼魚、成魚の生息環境を守り、さらにそれらの間の移動を保障することが重要である。イトウがすめる川のあり方を真剣に考えなければならない時期にきている。